大妻女子大学紀要―文系―　第四十三号、平成二十三（二〇一一）年三月

『源氏物語』の「妻戸」考

――寝殿造の出入口――

倉田　実

はじめに

平安貴族住宅の寝殿造において、寝殿や対の屋の出入口となる妻戸が、『源氏物語』でどのように機能しているのかを考えてみたい。平安朝文学作品で語られる住宅場面は、寝殿造の構造に規制されて成り立っていることは言うまでもない。したがって、ささやかな建築語彙であっても、当時の邸宅観・住居観あるいは住まいの慣習に応じた理解が必要となる。寝殿などの出入口となる妻戸においてもこの例外ではない。そこで、この小稿では、寝殿造の様式や構造を踏まえつつ、物語における妻戸の機能性を『源氏物語』から考えていくことにしたい。妻戸も物語を展開させる一つの装置となっている。また、妻戸のある場面には類型性が認められるようである。本文は新全集を使用する。

一　寝殿造の妻戸

妻戸は、『家屋雑考』に、次のように説明されている。

妻戸、抓戸等の字を用ふるは、いづれも訓を借り用ひたるにて、端戸（ハシト）の義なり、ツマとは、すべて物のはしをいふ名なればなり、

妻戸は本来「端戸」の意であった。建物や部屋の端などに設けられた戸を指したが、「妻」は「端」の意にもなるので、混淆したことになる。したがって、妻戸は必ずしも建物外部への出入口だけでなく、端と意識される戸にも使用されていた。例えば、『禁秘抄』で「夜御殿／四方有妻戸、南大妻戸一間也」とあるのはこの例となる。母屋の一部で外部と接しない清涼殿の「夜御殿」の四方の戸を、端戸の意で妻戸と言ったのである。また、「廊の戸」「廊の妻戸」とされるのは、中門廊の中門北側に設けられた妻戸のことで、これも端に位置するので端戸のことであった。こうした用例があるものの、貴族邸宅の寝殿や対の屋において、妻戸と言えば、建物外部との出入口を指すのが普通である。本稿で扱うのも主にこの用例である。

妻戸は構造的には枢戸と呼ばれ、厚い板扉の片端の上下に「戸まら」と呼ぶ突起を設け、それを「戸ぼそ」と呼ぶ刳り抜いた穴にはめて開閉できるようにした、両開きの仕様となる。開閉は外開きとなり、内部から「押し開く」「放つ」もので、施錠されると外部からの自由な開閉はできなかった。

南面して建つ東西棟となる寝殿では、東西それぞれの妻面の南側と北側に二か所ずつ設けられていた。これらは「東の妻戸」「西の妻戸」などと方位で呼称されたが、寝殿は南面が中心になり、この言い方で、

南側のものを指すことが多かった。厳密に指示すれば、「東南の妻戸」「東北の妻戸」「西南の妻戸」「西北の妻戸」となるが、東西どちらかを言えば、それで了解されたのである。妻戸以外の部分には格子が嵌められ、一枚格子で上げてあるか、二枚格子で下側がはずされていれば、ここからの出入りも可能であった。したがって、妻戸と格子の機能が重なることになるが、格子については別稿[1]を参照されたい。

妻戸の外側は簀子で、寝殿の場合は対の屋と結ばれる渡殿に続いている。妻戸を入ってすぐの内部は、〈妻戸の間〉〈隅の間〉などと呼ばれていた。建物内部の四隅に位置する一間四方の廂の間である。扉は日常的には閉められていたが、開けている時は、〈妻戸の間〉に御簾を下して几帳を添え、内部が見られないようにした。さらに、〈妻戸の間〉とその奥の廂の間とのあいだには、障子が設置されたり、屏風が置かれたりして、内部を二重に見えにくくさせていた。寝殿造は開放的なので、こうした屏障具が必要であった。

寝殿の妻戸口では、そこに車を寄せて乗降することもあった。中門廊の車寄を使用しないのであり、主人筋の女性や身分が高い人の場合などは、ここを利用していた。「人召して、車、妻戸に寄せさせたまふ」（東屋・九三頁）とあるのはこの場合であり、薫が三条の小家から浮舟を宇治に連れ出す際の用例である。また「上りたまはで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞゐたまひけるも」（蜻蛉巻・二三六頁）とあるのは、病死と伝えられた浮舟の死の真相を尋ねるべく宇治に赴いた薫が、穢れに触れないために寝殿に上がらず、妻戸前で牛車の榻に腰掛けている様である。妻戸口が車寄になるのである。

『源氏物語』で、妻戸の用例は右の2例を含めて32例認められ、この他に「戸」「戸口」で示される場合もある。単に「戸」などとある場合には、障子や板戸などの遣戸（引戸）との弁別が必要になるが、場面的・文脈的にどれであるかは、ほぼ特定できる。障子は開閉されることで、妻戸と機能が重なるわけだが、障子についても別稿[2]を参照されたい。遣戸は、『源氏物語』の高級貴族邸宅の寝殿や対の屋に用例はないが、後宮殿舎では出入口としてのそれも認められる。ただし、『源氏物語』でも渡殿などに設けられた女房の局における出入口の戸は、遣戸となる板戸であったと思われる。院政期の史料では、邸宅内部の襖障子を遣戸とする場合があるが、これはここでの問題ではない。

妻戸の概略は以上にとどめて、以下は妻戸が物語展開に有効に機能していると認められる表現の型を措定して具体的に指摘していきたい。

二　妻戸を開けさせる作法

まず、閉められていた妻戸を開けてもらう際の作法である。これには幾つかの合図の仕方があった。薫が二条院の中の君のもとに早朝訪れた際に、「格子、妻戸などうち叩き、声づくらんこそ、うひうひしかるべけれ」（宿木巻・三九一頁）と思っていたように、締め切られた建物内に入る際に、来訪者や外部にいる人は、格子や妻戸を「叩く」、「声づくる」などの合図を送ったのである。この他、戸や扇を「鳴らす」、あるいは「しはぶく」などの場合もあり、これらの行為・作法でもって、妻戸などを開けてもらっていた。こうした折に応じた多様な合図の作法が、物語展開にもかかわっている。

次の用例は、妻戸ではなく格子を「叩く」場合になるが、これを受けてその後に妻戸でも行われている。光源氏に空蟬との逢瀬をとりもとうとする小君の様子である。

東の妻戸に立ててたてまつりて、我は南の隅の間より、格子叩きののしりて入りぬ。（空蟬巻・一一〇頁）

光源氏を紀伊守邸に夜更けて案内した小君は、光源氏を「東の妻戸」の前に立たせておいて、自身は「南の隅の間〈妻戸の間〉」の南側の格子を大げさに叩いて中に入れてもらっている。「叩く」は常套的手段だが、「ののしりて」は、わざとする行為である。小君は、幼さを演技し、自分一人であることをそれとなく示しているのであろう。

この後、光源氏はこの格子から空蟬と軒端荻が碁を打つところを垣

間見することになる。碁も終わろうとする頃、小君は光源氏のもとに戻り、人々が寝静まった気配に、建物内部に光源氏を導こうとする。手引きする小君は、今度は妻戸を叩いている。

こたみは妻戸を叩きて入る。みな人々しづまり寝にけり。「この障子口にまろは寝たらむ。風吹き通せ」とて、畳ひろげて臥す。御達東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童べもそなたに入りて臥しぬれば、とばかりそら寝して、灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。（空蟬巻・一二三頁）

格子は鍵がかけられたので、今度は妻戸を叩いて開けてもらい、自分だけが中に入っている。状況的に叩いたのは誰だか分かるので、「童べ」はすぐに妻戸を開けたのである。小君は〈妻戸の間〉に入り、「東の廂」に続く「障子口」に畳を広げて横になっている。聞こえよがしに「風吹き通せ」と言っているのは、妻戸を開けたままにしておくためであり、自ら〈妻戸の間〉に寝ることで不用心を咎められないようにしたのである。「東の廂」では、すでに女房たちが寝ており、「童べ」もそこで寝についてしまう。小君はしばらく空寝をしてから、「灯明き方（東廂であろう）」に屏風を広げ、光が〈妻戸の間〉に漏れないようにして密かに光源氏を招じ入れている。小君は妻戸から扉を叩けば中に簡単に入れたが、光源氏のように忍びこもうとする際には、内部の協力者が必要なのであった。そのために小君はわざと妻戸を閉めずに寝る振りを〈妻戸の間〉でしたのであった。小君は、妻戸と〈妻戸の間〉において機転を働かせたのである。

光源氏は邸内にすでに入っていたので、妻戸だけが障碍であったが、普通は門内に入れるかどうかが肝心である。

門うち叩かせたまへば、心も知らぬものの開けたるに、御車をやをら引き入れさせて、大夫妻戸を鳴らしてしはぶけば、少納言聞き知りて、出で来たり。（若紫巻・二五三頁）

光源氏が紫の君を自邸に連れ去ろうとして、その住まいを訪れた段である。夜に門内に入るには、門扉を叩いて開けてもらうわけだが、ここの門番は誰何せずに開けている。式部卿宮の来訪と勘違いしたのかもしれない。そのせいで車はやすやすと邸内に入ることができ、大夫惟光は案内を通すために「妻戸」を「鳴らしてしはぶ」いている。ここの妻戸は、中門廊のものとも考えられるが、寝殿のものであろう。惟光が妻戸を「鳴らし」たうえで「しはぶき」をしているのは、誰であるのかを示す合図となる。中にいた少納言の乳母は、その「しはぶき」で惟光と察している。これまでに少納言の乳母と惟光は、「しはぶき」で誰であるかが理解できるほどの交渉があったことになる。惟光は、名乗りもせずに妻戸を開けさせることができ、光源氏を中に入れることができている。門番の不用心と「しはぶき」とによって、紫の君を光源氏邸に連れ去ることを、誰にも知られないようにしたことになる。妻戸に関して言えば、その前での「しはぶき」が有効なのであった。

次は、妻戸を叩くという表現が使用されずに、その行為があったことを暗示する例である。須磨・明石から京に帰還した光源氏が花散里を訪ねる段である。

女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近ううちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だに驚かさずはいかにして荒れたる宿に月をいれましいとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、「とりどりに捨てがたき世かな。かかるこそなかなか身も苦しけれ」と思す。

「おしなべて叩く水鶏におどろかばうはの空なる月もこそいれうしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など、疑はしき御心ばへにはあらず。（澪標巻・二九七～八頁）

光源氏は、姉の麗景殿女御のもとから、妹の花散里の住まう西面に回り、「西の妻戸」に立ち寄っている。この姉妹は、寝殿を東西に分け

て住んでいる。東面から光源氏は南簀子を通って「西の妻戸」に回ったことになるが、「月おぼろに」差し込む「端近」に居たとされる花散里は、簀子を歩く姿が格子越しに見えたのであろうか。物語は光源氏が「西の妻戸」に来たことを語っただけで、花散里との贈答歌に及んでいる。これは、妻戸を叩いて合図したことを直接語らずに、「水鶏のいと近う鳴きたるを」や花散里の贈歌で暗示しているのである。「水鶏」の鳴き声は、戸を叩く音になぞらえるのが当時の常套であった。「水鶏」が鳴き、花散里が「水鶏だに驚かさずは…」と詠んだのは、水鶏が叩くように鳴いて「驚か」したということに、光源氏が妻戸を叩いて来訪を告げたのをよそえたことになる。だから、光源氏の返歌に「叩く水鶏」が使用されている。具体的な行為を語らずに、「水鶏」を示すことで妻戸が叩かれたことを暗示したのである。高度な語りの技法となろう。

次は、妻戸なのか障子なのか判然としない例になるが、以上のことの関連で見ておきたい。扇を鳴らして戸を開けさせる例である。

宮は、教へきこえつるままに、一夜の戸口に寄りて、扇を鳴らしたまへば、弁参りて導ききこゆ。さきざきも馴れにける道のしるべ、をかしと思しつつ入りたまひぬるをも姫宮は知りたまはで、こしらへ入れてむ、と思したり。（総角巻・二六四頁）

薫が、匂宮を、中の君の寝所に入れようと謀る段である。寝所への侵入の仕方を薫から教えられていた匂宮は、「戸口」に近寄って扇を鳴らしている。「一夜の戸口」とは薫側に立っての表現で、これ以前に弁の手引きで薫が姉妹のもとに忍んだ時の戸口であることを言っている。その時と同じように、薫は匂宮を自分の替わりに立たせたのである。合図をすれば事情を知らない弁が施錠してある戸を開けてくれることになっている。匂宮は、「扇を鳴らし」て合図を送り、弁に薫と思われたまま中に入ることに成功している。ここで「叩く」ことをすれば内部の中の君に気付かれ、「しはぶき」なら誰と分かってしまう。「扇を鳴ら」す音なら、誰がたてたかは知られず、雑音に紛れてしまう。戸を開けさせる作法が色々とあり、物語はそれを有効に活用して、戸の内部に入る行為を語り分けているのである。

以上の他に、芳香で人物が誰であるかが分かり、妻戸が開けられる用例がある。薫の場合である。「竹河」巻、正月下旬に玉鬘邸を尋ねた薫が、南庭から寝殿に近寄った段である。

梅が枝をうそぶきて立ち寄るけはひの花よりもしるくさとうち匂へれば、妻戸押し開けて、人々あづまをいとよく掻き合はせたり。（竹河巻・七一頁）

薫独特の芳香が女房たちに知られており、その匂いで来訪を察し、廂の間に招じ入れるために妻戸を押し開けたのである。宇治十帖でも語られる薫の芳香は、何もせずに妻戸を開けさせたのである。

三　〈閉ざされた妻戸〉と〈開かれた妻戸〉

ここでは、妻戸の開閉のありようが、人物たちと象徴的にかかわる例を扱う。次の用例は「花宴」巻、宮中での花宴が終わった後、光源氏が後宮殿舎の藤壺や弘徽殿の辺りを徘徊する段である。

もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。女御は、上の御局に、やがて参う上りたまひにければ、人少なるけはひなり。奥の枢戸も開きて、人音もせず。（花宴巻・三五六頁）

光源氏は藤壺中宮との逢瀬の機会を窺って藤壺（以下、飛香舎とする）に近づき、「語らふべき戸口」を探っている。「語らふ」相手は王命婦であり、飛香舎に局があるのであろう。光源氏はその手引きで藤壺に近づこうと考えていたのである。ここの「戸口」は、飛香舎のどこを念頭に置いて示されたのかは不明である。飛香舎の構造を記す基本的史料は、院政期の『山槐記』応保元年十二月十七日条の指図にな

るが、これには注記がない。他史料を参照しても、東西の妻面の蔀（格子）と、南面の妻戸が分かるぐらいであり、北面などは詳しく分からない。王命婦の局の位置も特定できず、「戸口」が妻戸なのか遣戸なのかの別も分からない。しかし、『源氏物語』のこの場面では、どちらでも構わないのであり、「戸口も鎖してければ」ということが確認できればいいことになる。施錠されて閉ざされ、内部への侵入が不可能であることを示しているのであり、藤壺中宮の隙のないたしなみを暗示するのである。戸の種別に問題を残すが、この用例をひとまず、「閉ざされた妻戸」として理解しておきたい。

落胆した光源氏は、飛香舎の西側に位置する「弘徽殿の細殿」に回っている。この「細殿」は、九間とみられる弘徽殿西廂を指すことは間違いないが、「三の口」が未詳である。『大内裏図考証』では、「弘徽殿西庇（廂）」の項に「承安五節図、西面屋垣、毎間有遣戸」、「西面戸」の項に「承安五節図、細殿西面、毎間有戸」などとあるので、西廂を細殿と呼び、間ごとに遣戸があったことになる。ここから「三の口」は、南から三番目の遣戸口と解されることもある。しかし、模写で残る「承安五節図（絵）」では、一間おきに遣戸があるように描かれていて、これによると戸が幾つなのかも不明となり、「一の口」をどこから数えるのかに諸説が生じている。また、「奥の枢戸」の位置も不分明で、今日では弘徽殿母屋中央部に東西方向に通る馬道があり、西廂（細殿）との境にあるものとされることが多い。

確かなのは、弘徽殿では、遣戸の「三の口」が開いていて、そこから見える「奥の枢戸」も開いていたということである。すなわち「開かれた遣戸・枢戸」であり、飛香舎の「閉ざされた妻戸」との対照性が浮かび上がることになる。「開かれた戸」は、その内部への侵入が断りなく容易となる。恋物語の展開では、その後に逢瀬が語られる。弘徽殿では、知られるように、この後、朧月夜の君との契りへと展開している。

契りの段階では朧月夜の君の素姓は光源氏には不明であったが、その後、右大臣六女の朧月夜の君であったと察することになる。右大臣邸東の対で開かれた藤花の宴に招待された光源氏は、朧月夜の君が気にかかり、その居所となる寝殿に近づいている。

寝殿に女一の宮、女三の宮のおはします、東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤はこなたのつまにあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人々出でゐたり。袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。「なやましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれど、の御前にこそは、蔭にも隠させたまはめ」とて、妻戸の御廉を引き着たまへば、「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」といふ気色を見たまふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣のおとなひいとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。（花宴巻・三六四～六頁）

光源氏は東の対から寝殿の「東の戸口」に歩みより、下長押に「寄り」かかって座っている。ここは東南の妻戸口であり、藤花の宴を見るために扉は開かれていた。寝殿には弘徽殿女御所生の女一の宮と女三の宮も滞在しており、女房たちは派手な装いで押出をしている。光源氏は、その風儀を不似合いだとして、「まづ藤壺わたり」を思い出している。藤壺中宮のありようとの差異を感じたのである。しかし、内部への興味もあり、「妻戸の御廉を引き着」て、ここに居させてほしいと懇願している。妻戸は開かれていたので御簾が下されていたのである。その御簾を引き被るようにして内部に姿勢をとることは、求愛の仕草に近い。しかし、「戸口」の内部を占有していた女性たちは、光源氏に「妻戸の御廉を引き着」て、中を覗くような素振を許している。光源氏であったから、このような仕草を許容したのである。そして、

その中に朧月夜の君も交じっていたのであった。

「花宴」巻は、光源氏に朧月夜の君の存在を知らせるだけで幕を閉じている。〈開かれた妻戸〉で、その「妻戸の御廉を引き着」た様子を語ることによって、弘徽殿での時と同じように、契りを暗示させていることになろう。すぐれた省筆の語りであった。

藤壺中宮のたしなみと、朧月夜の君のやや軽佻な性情と振舞、逢瀬がないことと契りがあること、それを〈閉ざされた妻戸〉と〈開かれた妻戸〉という対照性でもって象徴的に暗示していたと言えよう。

四　招き入れる〈開かれた妻戸〉

〈開かれた妻戸〉が、たしなみのなさを表現する一方で、来訪が分かっていれば、あらかじめ〈開かれた妻戸〉にして、中に招じ入れるという場合も認められる。次は、光源氏が明石の君と契りを結ぶ段である。

造れるさま木深く、いたき所まさりて見どころある住まひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて思ひのこすことはあらじと思しやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の声松風に響きあひてもの悲しう、巌に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。前栽どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。むすめ住ませたる方は、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口けしきばかりおし開けたり。（明石巻・二五五～六頁）

光源氏は海辺に用意されていた自身の居所から、明石の君の住む岡辺の邸に赴いている。岡辺の邸には始めての訪問のはずだが、光源氏は迷うことなく、前栽の虫の声を聞きながら庭伝いに「むすめ住ませたる方」に向かっている。ここはそれとは語られていないが、案内する者がいたことになる。光源氏が建物（寝殿か）に上がってみると、「真木の戸口」が少しばかり開かれていた。「真木」とあるので上質の妻戸となろう。戸が開けられていたのは、光源氏を導き入れるためであり、明石の君との契りを要請し、許容していることを示している。それを了解した光源氏は、そのまま明石の君のもとに行くことになる。物語は、「真木の戸口けしきばかりおし開けたり」と語るだけで、次は二人の場面に転じている。来訪がそれと分かる出逢いの一日目は、招き入れるために〈開かれた妻戸〉にしておくことが窺えよう。

次は、六条院入りした玉鬘のもとに光源氏が始めて訪れる段である。この段は、擬似的な出逢いの一日目が演出されているようである。

その夜、やがて、大臣の君渡りたまへり。昔、光る源氏などいふ御名は聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしさに、さしも思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳の綻びより、はつかに見たてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。渡りたまふ方の戸を、右近かい放てば、「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」と笑ひたまひて、廂なる御座についゐたまひて、「灯こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものとこそ聞け、さも思さぬか」とて、几帳すこし押しやりたまふ。（玉鬘巻・一二九頁）

玉鬘の居所は六条院夏の町の西の対である。光源氏の訪れは、玉鬘を六条院入りさせた右近（元、夕顔の侍女）に知らされていたのであろう。「右近かい放てば」とあるように、右近は、訪れを察知して、「渡りたまふ方の戸」、すなわち光源氏が西の対に入る妻戸を内部から押し開けている。〈開かれた妻戸〉にしたのである。光源氏は何の音ないもなしに、西の対に入ることができている。主人のお越しであるから、右近は先だって妻戸を押し開けたわけだが、光源氏が、「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」と戯言を言っているのは示唆的であろう。これは『湖月抄』師説の「此戸口は、けさう人などの入りぬべきかた也との心也」としている通りであろう。契りを結ぶ一日目は〈開かれた妻戸〉にするからこそ、光源氏はこう言ったのである。集成本が「恋人を迎え入れるような右近の戸の開け方に、冗談をいう」としているが、「恋人」ではなく出逢う一日目のように開けたということであろう。

だから、光源氏はさらに、「灯こそいと懸想びたる心地すれ」と戯言を重ねるのである。

招き入れるために〈開かれた妻戸〉にするという用例は、右の二例だけであり、いずれも「妻戸」とは語られていない。しかし、ここは妻戸で問題はなかろう。また、二節で見た薫の芳香が妻戸を開けさせた用例も加えることができそうだが、これは別に考えた方がいいかと判断される。右の二例は、出逢いの一日目の演出として理解しておきたい。前節の「花宴」巻でみた〈開かれた妻戸〉が、契りを暗示させていたのも、男女が出逢う一日目のありようとかかわっているのかもしれない。

五　〈開かれた妻戸〉からの採光

夜の建物内は暗く、灯台の火がかすかに灯るだけであった。もしその灯が消えてしまえば、外部に灯を求めることになる。某院で夕顔が頓死した際に灯は消えていて、光源氏は「西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の灯も消えにけり」（夕顔巻・一六五頁）という事態に遭遇していた。建物内の夜の暗さが、怪異となっていたのである。したがって、朝ともなれば、最初にする仕事は妻戸や格子を開けることであった。〈開かれた妻戸〉は、格子とともに、採光の役割を持っていた。

朝日や夕日、あるいは夕月が差し込めば、内部は明るく見えやすくなる。二節で引用した「澪標」巻で光源氏が花散里のもとに訪れた時も、「月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ」とあったのは、「西の妻戸」が開けられたままだったからである。

この他では、末摘花の物語において妻戸の採光の役割を活用し、その容貌を光源氏に見させている。

日さし出づるほどにやすらひなして、出でたまふ。東の妻戸押し開けたれば、むかひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。御直衣など奉るを見出だして、すこしさし出でて、かたはら臥したまひつる頭つき、こぼれ出でたるほど、いとめでたし。生ひなほりを見出でたらむ時、と思されて、格子引き上げたまへり。（末摘花巻・二〇三頁）

正月も七日になって光源氏が末摘花を訪れ、朝日が射すころに帰ろうとする段である。開かれた「東の妻戸」から「日の脚、ほどなくさし入り」、さらに雪の光も加わって、内部がよく見えるのである。にじり出てきた末摘花を認めた光源氏は、「生ひなほりを見出でたらむ時」は、どんな感じがするのだろうかと思って、さらに格子を引き上げている。光を強くして、もっとはっきりと末摘花の容貌を見ようとしたのである。妻戸と格子が採光の役割を持ち、末摘花を照らすのである。同じことは、夕月のもとでも語られている。

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に変らぬ御しつらひのさまなど、忍ぶ草にやつれたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に、たふこぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじ、と心苦しく思ひしを、年ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。（蓬生巻・三五二頁）

京に帰還した光源氏が末摘花邸を訪れた夕方の段である。「西の妻戸」が開いていて、そこから入り方の月光が「いとはなやかにさし入り」照らすので、室内のそこかしこがよく見えるという。室礼の様子は「みやびか」で、「ひたぶるにものづつみしたるけはひ」の末摘花は、「あてやか」だと光源氏に見られている。夕月で照らされた室内と末摘花

の様子を確認したことで、光源氏は、京に不在中の辛苦の生活を思いやりつつ、いじらしく思うのである。妻戸から差し込む光によって、末摘花の容貌や性格が照らし出されるのである。また、「末摘花」巻は朝日なので「東の妻戸」が、「蓬生」巻の夕月に対しては「西の妻戸」というように、物語は東西をきちんと語ることを忘れないのである。

六　接客の場としての〈妻戸の簀子〉と〈妻戸の間〉

光源氏が先の「花宴」巻で右大臣邸寝殿の妻戸に赴いたのは、そこが接客・応接の場であったからである。寝殿造には独立した接客空間は不在であり、時と場合に応じて、簀子や廂内部が使い分けられていた。寝殿まで来ることが許された人のまず居場所とされたのが、妻戸の前の簀子であった[3]。このことは型というよりも、当時の住まいの慣習となるが、「花宴」巻以外の用例を確認しておきたい。

ゆゆしげにひき隔てめぐらしたる儀式の方は隠して、（夕霧を）この西面に入れたてまつる。大和守出で来て、泣く泣くかしこまり聞こゆ。妻戸の簀子に押しかかりたまうて、女房呼び出でさせたまふに、あるかぎり心もをさまらず、ものおぼえぬほどなり。（夕霧巻・四四〇頁）

一条御息所死去の報を聞いた夕霧が、弔問のために小野山荘に訪れた段である。この山荘は寝殿造であり、寝殿を東西に分けて、西面を落葉宮が使用していた。夕霧は落葉宮に弔問の意を伝えるのが目的であり、対面できるとは思っていない。だから「妻戸の簀子に押しかかり」、女房を呼び出して相手にしている。これは、簀子の外側に廻らす高欄に背中を押しつけて座るさまである。夕霧は、女房を介して落葉宮の面会不能を聞かされ、廂に入ることなく帰邸している。弔問目的で、落葉宮が対面するはずもないと判断しているので、「妻戸の簀子」が居場所となったのである。続く用例も同じである。

例の妻戸のもとに立ち寄りたまて、やがてながめ出だして立ちたまへり。（夕霧巻・四四八頁）

再び夕霧が小野に訪れた段であり、「例の妻戸のもと」で辺りを眺めている。妻戸の前の簀子に、以前と同じように来たのである。ここが接客の場であったからである。

寝殿などでなくても、妻戸の前はやはり接客の場であった。『源氏物語絵巻』「竹河㈠」に描かれている、薫が尚侍玉鬘を訪ねた段である。

尚侍の殿、御念誦堂におはして、「こなたに」とのたまへれば、東の階より上りて、戸口の御簾の前にゐたまへり。（竹河巻・六八頁）

念誦堂にいた玉鬘は、薫を妻戸の前に来させている。薫は庭伝いに来て「東の階より上りて」簀子に上がり、妻戸の「戸口の御簾の前」に座ったのである。玉鬘は、後文に「尚侍の君、奥の方よりゐざり出でたまひて」とあり、〈隅の間〉に出て応接することになる。次も妻戸の前である。

立ち出でて、一夜の心ざしの人に逢はん、ありし渡殿も慰めに見むかし、と思して、御前を歩み渡りて、西ざまにおはするを、御簾の内の人は心ことに用意す。げにいとさまよく、限りなきもてなしにて、渡殿の方は、左の大殿の君たちなどゐて、もの言ふけはひすれば、妻戸の前にゐたまひて、（蜻蛉巻・二五五頁）

薫が明石中宮の御前を辞して、「一夜の心ざしの人（小宰相の君）」に逢いたい、女一の宮を垣間見た「ありし渡殿」を慰めに見たい、などと思いつつ西の対に向かい、「妻戸の前」に座って、中にいる女一の宮付きの女房に話しかけている。渡殿には、夕霧の子息たちがいたので、ひとまずここに座ったのである。「妻戸の前」は応接の場なのであり、中の女房たちと男性官人とが言葉を交わして交誼を持つのである。

右の薫のような場合は、建物内部に入ることはないが、親密な関係になると〈妻戸の間〉で接客されることになる。

殿は、あいなく、おのれ心げさうして、宮（蛍宮）を待ちきこえたまふも、知りたまはで、よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。妻戸の間に御褥まゐらせて、

御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。（蛍巻・一九八頁）

光源氏が蛍火のもとで玉鬘を蛍兵部卿宮に垣間見させようと「妻戸の間」に招じ入れた段である。「妻戸の間」と続く廂の境には「御几帳ばかりを隔て」として、母屋に控える玉鬘とは近い距離だとされている。蛍兵部卿宮は室内に入ることが許されたが、ひとまずは入ってすぐの「妻戸の間」に控えさせられたのである。

妻戸を境にして、外側と内側は接客の場となるが、そこには格差があった。外側は挨拶や交誼の場となり、内側はより親密な場となっている。妻戸は、人間関係を表象する境として位置づけられるのである。なお、妻戸までは、文使いが直接来ることもあり、その応接の場でもあった。

今朝、かの宇治に、出雲権守時方朝臣のもとにはべる男の、紫の薄様にて桜につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房にとらせはべりつる見たまへつけて、しかじか問ひはべりつれば、言違へつつ、そらごとのやうに申しはべりつるを、（浮舟巻・一七三頁）

薫が随身から、浮舟側に匂宮の手紙が届けられたことを知らされる段であり、引用はその報告の一部である。「出雲権守時方朝臣のもとにはべる男」が文使いとなって、恋文を思わせる「紫の薄様にて桜につけたる文」を、「西の妻戸」で浮舟の女房に渡されたという。重要な用件の文使いは、直接妻戸まで行き、そこで手渡したことが知られよう。侍所などに託すことはしないのである。

七　〈開かれた妻戸〉からの垣間見

妻戸は普段閉じられているが、たまたま開いていて垣間見されるという類型が認められる。

舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りてのぞきたまへば、悩ましげにて添ひ臥したり。ただかの人の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければこまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引きならいたまふに、（少女巻・六一頁）

雲居雁と別れさせられた夕霧が、五節の折に二条院西の対に紛れ込み、惟光女の舞姫に戯れかかる段である。舞姫は「妻戸の間」に一時的に控えさせられている。「妻戸の間」には戸口に屏風が立てられ、その影に隠れるようにして舞姫が横臥して休み、裾が妻戸の方に引かれていた。夕霧はその裾を引いたのである。この場の状況はこれ以上語られていないが、「かりそめのしつらひ」の休み所とされているので、妻戸は開けられ、御簾も巻き上げられていたのであろう。だから、夕霧は舞姫の存在に気付いたことになる。〈開かれた妻戸〉からの垣間見がこうして可能となり、夕霧は舞姫に思いをかけていくことになる。

垣間見は、男女関係に限定されるものではない。次は父が娘を垣間見る場合である。

たたずみおはしてのぞきたまへば、簾高くおし張りて、五節の君とて、ざれたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、「小賽、小賽」と祈ふ声ぞ、いと舌疾きや。あな、うたて、と思して、御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまうて、なほ妻戸の細目なるより、障子の開きあひたるを見入れたまふ。（常夏巻・二四二〜三頁）

内大臣は、「北の対の今君」とされる近江の君と侍女五節の君とが双六をしているのを、開いていた妻戸と障子を通して垣間見ている。内大臣はこの垣間見で、貴族女性としてのたしなみが欠如した近江の君の性情を確認することになる。

二人がいる北の対の構造はよく分からないが、寝殿と同じく東西棟で、南廂があり、その両端が妻戸になっているのであろう。二人は、〈妻戸の間〉の先の「障子」の奥にいるようなので、南廂の「二間」あたりにいることになる。この「障子」は、〈妻戸の間〉とそれに続く南

廂を東西に区画するために置かれている。「妻戸」は細目に開いていて、妻戸の御簾は巻上げられていたことになろう。そして、「障子」まで閉められていなかったのである。だから二人の様子は、外部から容易に見ることができたのである。たしなみの欠如が暗示されるのであり、〈開かれた妻戸〉ということになるが、ここは垣間見を容易にさせる条件となっている。

廂にいる二人は、「簾高くおし張りて」双六に興じている。この簾は「廂の御簾」で、簀子との境に垂らされていて、それを体で外に押し出すようにしているのである。端近どころか端居となろう。そんな様子まで内大臣は目撃してしまっている。普段は、妻戸が閉じられ、障子も閉ざしておくのがたしなみとなるが、それが欠如していたことでこのような垣間見が可能なのであった。

たしなみがあっても特別な事情で〈開かれた妻戸〉になることもある。夕霧が紫の上を垣間見る段である。

中将の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音もせで見る。御屏風も風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、（野分巻・二六二頁）

夕霧は野分見舞に六条院春の町を訪れ、「東の渡殿」を通って寝殿に向かおうとしている。寝殿東の「妻戸」は開いていて、その奥に障子の代用として置かれていた屏風は、野分の風がひどく吹いたので畳まれていた。そのために、南廂中央あたりの「廂の御座」に座っていた紫の上の姿が外部から見えたのであった。内大臣の垣間見の時は妻戸の奥に障子があり、ここは屏風という違いがあるが、ともに屏障具としての役割が解除されている状態であった。そして〈開かれた妻戸〉であったので、垣間見が可能なのであった。

夕霧が垣間見しているさなか、光源氏が寝殿西面から紫の上のもとに戻ってくる。格子も上げられていたので、光源氏は「御格子おろしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」（二六六頁）と注意して、さらに夕霧の来訪を告げる咳払いに、「さればよ、かの妻戸の開きたりけるよ」と用意のなさを咎めている。そして、翌日には、紫の上垣間見に衝撃を受けて動揺を隠せない夕霧の様子から、光源氏は「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけん。かの戸の開きたりしによ」（二七六頁）と紫の上に話している。妻戸が開いていたことを光源氏は二度も話題にしており、夕霧の垣間見で〈開かれた妻戸〉がいかに重要な設定であったかを提示している。

夕霧は玉鬘に寄り添う光源氏も垣間見しており、これも状況的に〈開かれた妻戸〉からであった。

中将、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをらひき上げて見るに、紛るる物どもも取りやりたれば、いとよく見ゆ。かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは、と目とまりぬ。（野分巻・二七八～九頁）

夕霧は「隅の間の御簾」から垣間見している。この「御簾」は妻戸に下がるもの以外に考えられないので、妻戸から覗いたのである。光源氏が玉鬘の住む西の対に入った際、妻戸はきちんと閉められなかったのである。そして、野分の騒ぎで、「几帳は添ひながらしどけなきを」とあるように、内部への視線を防ぐはずの几帳が、ここでも御簾にきちんと添えられていなかったのである。また、この引用部以前には、「屏風などもみなたたみ寄せ、物しどけなくしなしたるに」とあり、御簾をそっと引き上げるだけで、「隅の間」の先まで見通せたのである。夕霧が見たものは、妹と知らされていた玉鬘に寄り添う父光源氏であった。

夕霧の妻戸からの垣間見はさらに続き、次は意識的に明石の姫君を見ようとしている。

見つる花の顔どもも、思ひくらべまほしうて、例はものゆかしか

らぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻びより見れば、物のそばより、ただ這ひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。（野分巻・二八四頁）

夕霧は、垣間見た紫の上と玉鬘を、それぞれ樺桜と八重山吹によそえていた。明石の姫君と較べてみたい衝動にかられて、「妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻び」から垣間見している。妻戸には「御簾」が下され、「几帳」が添えられてはいた。しかし几帳の帷子には縫合されない「几帳の綻び」があったから、「妻戸の御簾」をひき被るだけで内部への視線が可能なのであった。こうして夕霧は明石の姫君の姿も視認したのである。夕霧は、明石の姫君を藤の花によそえている。

『源氏物語』は、夕霧において〈開かれた妻戸〉からの垣間見を様式的に高めていよう。妻戸は垣間見ともかかわり、物語展開において重要な装置なのである。

八　妻戸での後朝の名残

これまでは、身体や視線が妻戸から内部に向かう用例であったが、外に向かう場合も当然ながら多く認められる。寝殿や対の屋の妻戸から出ることは、それで別れる、帰る、去ることを意味していた。寝殿造の場合、玄関はないので、妻戸がそのような役割の一つを果たしたのである。

例えば、匂宮と浮舟が橘の小島から帰った際に、「右近、妻戸放ちて入れたてまつる。やがて、これより別れて出でたまふも、飽かずいみじ、と思さる」（浮舟巻・一五六頁）とあり、浮舟は妻戸の中に入り、匂宮は入らずに帰京することを「別れ」としている。妻戸は、別れの場なのである。この浮舟は、入水から蘇生してその折を想起した際、「皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに」（手習巻・二九六頁）というように、妻戸を出ることが去ることとしていた。また、一条御息所は加持にあたる律師から、「かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出でたまへる」（夕霧巻・四一七頁）様を聞いて、落葉宮が夕霧と関係して後朝の別れをしたと誤解することとなっていた。建物の出口となる妻戸は、邸内を出ることと同じような意味を持っていたのである。

通い婚（妻問婚）の場合、妻（愛人も）は、通ってきた夫（男）が早朝に帰る際に、自ら格子や妻戸を開けることはしない。妻戸を開けるのは、秘めた関係なら男性であり、そうでなければ女房の仕事である。また、男性を中門廊や正門まで見送るようなことはせず、寝所に臥したままか、あるいは寝殿の妻戸で後朝の別をしたのである。後者は妻問婚の後朝の別れの風情でもあった。『枕草子』「暁に帰らむ人は」段にも次のように記されている。

格子あけ、妻戸ある処は、やがて諸共に出で行き、昼のほどのおぼつかなから事なども、言ひ出でにすべり出でなむは、見送られて、名残もをかしかりなむ。（新全集・一一六～七頁）

後朝の風情を記す段である。妻戸のある所では、男が女と一緒に寝所からそこまで出て行き、別れ別れでいる昼間の不安なことなどを口にして帰って行くのは、女の方でもいつまでも見送る気持ちになり、一晩過ごした名残も風情があることであろうとしている。妻戸が別れの場であり、そこで男の気持ちを察しながら名残を惜しむというのである。

このことは、密通の場合でも同じであった。柏木と女三の宮の場合である。

明けゆくけしきなるに、出でむ方なく、なかなかなり。…かき抱きて出づるに、はてはいかにしつるぞ、とあきれて思さる。隅の間の屏風をひき広げて、戸を押し開けたれば、渡殿の南の戸の、昨夜入りしがまだ開きながらあるに、まだ明けぐれのほどなるべし、ほのかに見たてまつらむの心あれば、格子をやをら引き上げて、「かう、いとつらき御心にうつし心もうせはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれ、とだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを、いとめづらかなり、と思して、ものも言はむとし

たまへど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。

ただ明けに明けゆくに、いと心あわたたしくて、「あはれなる夢語も聞こえさすべきを、かく憎ませたまへばこそ。さりとも、いま、思しあはする事もはべりなむ」とて、のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋の空よりも心づくしなり。

起きてゆく空も知られぬ明けぐれにいづくの露のかかる袖なり

と、ひき出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰めたまひて、

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむべく

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。（若菜下巻・二二七～九頁）

柏木は女三の宮を「かき抱き」、「隅の間」に出ている。そして、「隅の間の屏風をひき広げて、戸を押し開け」ている。この「戸」は、「隅の間」とあるので妻戸である。屏風を広げたのは、自分の姿が外から見られないようにする為であり、妻戸を押し開けたのは別れを言うためである。妻戸口が別れの場なのであり、無理やりに女三の宮をそこまで抱いて連れ出して、名残とするのである。柏木は屏風で遮光された代わりに、格子をそっと引き上げて、女三の宮の様子を窺っている。夜はどんどん明けていく気配に、柏木は「起きてゆく空」に託して後朝の別れの歌を詠みかけている。格子を上げたので室内から空の様子が分かるのである。一方の女三の宮は「あけぐれの空」に我が身を失いたいと絶望している。この場面は、密通とはいえ、妻戸口が後朝の別れの場であることを提示している。また、空の風情が、後朝の名残とかかわっていることを示唆している。

そして、もっと逢瀬の余韻に浸っていたい時には、開けた妻戸から早朝の景色を二人で見るということもあった。『源氏物語』ではこれも型のように語られており、類例が認められる。次は、三日の婚儀も住んだ後に、宇治に訪れた匂宮が中の君と過ごした朝のことである。

明けゆくほどの空に、妻戸押し開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。（総角巻・二八二頁）

夜が明けていこうとする時分に、匂宮は自ら妻戸を押し開けて、中の君を誘い出し、「もろともに」空や宇治川の光景を見出している。余韻に浸るわけであり、また、二人で見たその折の光景は、逢瀬の思い出となるのである。これ以前に薫と大君の場合にも似たようなことが語られていた。

はかなく明け方になりにけり。御供の人々起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。（総角巻・二三六頁）

薫と大君にとって、契りは結ばないものの一晩共に過ごした初めての朝である。薫は、光の射している「障子を押し開け」て、空の風情を大君と「もろともに」見出している。二人で朝の光景を見ることで、名残を惜しむのである。そして、この折に見た光景が、擬似的な後朝の思い出となるのであり、この後、薫は同じようなことをしている。

妻戸押し開けて、「まことは、この空見たまへ。いかでかこれを知らず顔にては明かさんとよ。艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなりゆく、夜な夜なの寝覚めには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ。（宿木巻・四一八～九頁）

匂宮と六の君との婚儀がなった後、何かと物思いの尽きない薫が、

母女三の宮付きの女房で、召人の按察の君と一晩過ごした朝である。必要もないのに急いで起き出したのを咎められた薫は、按察の君とのあいだで歌の応酬をし、やや分の悪さを弁明しようとして、妻戸を押し開けている。そして、「この空見たまへ」と按察の君を誘い、朝の風情を見ないで寝ていられようかと思って急いで起きたのだ言っている。実際は寝覚がちで寝ていられなかったのが本当のこととなるが、薫のこの言葉は、それなりに本心を表している。明け方の空を見ていると、「この世あの世」まで思いやられるとするのは、亡き大君追慕の気持ちがあるからである。その大君と初めて一晩過ごした朝に、「空のあはれなるをもろともに」眺めたのであった。薫はその折を思い出したのである。後朝に、妻戸を押し開けて、空の風情を二人で眺めることは、逢瀬の思い出となることを型のように示している。

互いに近似的な薫と匂宮とであり、匂宮もまた浮舟と妻戸まで出ている。

今日さへかくて籠りゐたまふべきならねば、出でたまひなむとするにも、袖の中にぞとどめたまひつらむかし。明けはてぬさきにと、人々しはぶきおどろかしきこゆ。妻戸にもろともにゐておはして、え出でやりたまはず。（浮舟巻・一三五～六）

橘の小島から帰ろうとする段である。かつて中の君と後朝に妻戸から宇治川の光景を眺めたように、浮舟と酔い痴れた余韻に浸る匂宮は、同じように妻戸まで浮舟を連れ出して名残を惜しんでいる。語られてはいないが、二人で小島の光景を見出しているのかもしれない。妻戸を開けて「もろともに」朝の光景を見出すという後朝の風情が、以上のように認められるのである。そして、薫や匂宮の妻戸で「もろともに」空を見て名残を惜しむことは、柏木の場合に遡源できることになる。柏木の影は、その人物像だけでなく、後朝の別れの場にも及んでいるのである。

こうしてみると、また物語を遡ることになるが、次の用例も後朝の風情の変奏であったと理解されよう。「幻」巻、七夕が明けての朝である。

七月七日も、例に変りたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星合見る人もなし。まだ夜深う、一ところ起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞおきそふ（幻巻・五四三頁）

亡き紫の上を追慕する孤独な光源氏は、七夕の夜を独りで過ごしていた。そんな光源氏を思って女房たちは誰一人「星合」を見る人もいない。まだ夜深い時間に「一ところ」起き出した光源氏は、「妻戸押し開き」、前栽を見出している。こんな時間に起きて妻戸を開いたのは、逢瀬の名残を偲ぼうとするかのようである。しかし、逢瀬は独詠歌にあるように別世界のことであり、二星の「別れの庭」に紫の上との死別をよそえ、落涙する他はないと言うのである。妻戸は愛する人との後朝の別れの場になるが、いまは死別を観念させるものでしかない。妻戸を押し開けて「もろともに」外を眺めることは、光源氏に許されないのである。

九　後朝に妻戸で見送る女房

後朝に妻戸で男女が別れを惜しむ場合の他に、寝所に臥す女性に代わってその女房が、通って来た男性を妻戸から見送るということも語られている。これも一つの型となっているようである。次の引用は、光源氏が須磨退去の挨拶に左大臣邸を訪れて、翌朝帰る段である。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと白き庭に、薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。隅の高欄におしかかりて、とばかりながめた

まふ。中納言の君見たてまつり送らむとにや、妻戸押し開けてゐたり。（須磨巻・一六八頁）

「中納言の君」は亡き葵の上付きの女房で、光源氏の召人となっていた。光源氏が左大臣邸に泊まったのは、中納言の君と過ごすためでもあった。夜が明けて、中納言の君は、光源氏を見送るために、「妻戸押し開けて」そこに控えている。光源氏が「隅の高欄におしかかりて」座り、庭の風情を見渡していたからである。中納言の君は女房の役割として、そこに控えたのである。したがって、中納言の君は召人であり、光源氏と一晩過ごしたとしても、ここは女房の役割として「妻戸押し開けて」控えたのである。〈後朝に妻戸で見送る女房〉という形が認められるのであり、さらに用例を探すことができる。

次は、妻戸と明示されないが、それと見られる用例である。光源氏が明石一族の大堰邸に泊まって帰京する段である。

またの日は京へ帰らせたまふべきを、桂の院に人々多く参り集ひて、やがてこれより出でたまふべきを、ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、「いとはしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなく紛らはして立ちとまりたまへる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり。（松風巻・四一五頁）

この引用部の後に、明石の君は「なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず」とあり、寝所に臥したままである。一人起き出した光源氏が、妻戸の「戸口」に立ち止まっていたところに、乳母が明石の姫君を抱いて出て来ている。明石の姫君にさよならを言わせるためだが、一方では、寝所に臥す明石の君に代わって見送るためと見られよう。次も同じく乳母である。

わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの御夢に見えたまひければ、うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、鶏の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。なごりまでとまれる御匂ひ、たち「闇はあやなし」と独りごたる。（若菜上巻・六八～九頁）

光源氏と女三の宮との婚姻三日目の後朝である。光源氏は、紫の上と同居する東の対から、寝殿の女三の宮のもとに通うという形をとっている。しかし、物思いに心乱れる紫の上のことを夢に見た光源氏は、「夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ」ことをしている。女三の宮に幼稚な面があるために寝所近くに伺候していた乳母たちも起き出している。そして、「妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る」という次第になっている。光源氏が妻戸から出ていくのを、乳母たちは、女三の宮に代わって、「見たてまつり送る」ことをしているのである。これも、明石の姫君の乳母と同様に、女房としての乳母の役割であった。

次は、久方ぶりに対面を果たした尚侍朧月夜の君の元から、光源氏が帰ろうとする段である。

中納言の君、見たてまつり送るとて、妻戸押し開けたるに、たち返りたまひて、「この藤よ、いかに染めけむ色にか。なほえならぬ心添ふにほひにこそ。いかでかこの蔭をば立ち離るべき」と、わりなく出でがてに思しやすらひたり。（若菜上巻・八三頁）

ここも「中納言の君」だが、先の人物とは別であり、朧月夜の君付きの女房である。「賢木」巻の密会を手引きしていたのが、この中納言の君であった。その時から、二十年の月日が経過していた。中納言の君は、後朝に光源氏を見送ろうと「妻戸押し開け」て控えたのである。折しも藤花は満開で、光源氏に「花宴」巻の藤花の宴を想起させ、中納言の君に話しかけている。月日の重みがあり、見送る女房ともども妻戸で感慨に更けるのである。

おわりに

以上、妻戸の全用例を踏まえて、物語とのかかわりを考えてみた。妻戸はささやかな建築語彙だが、それでも、物語展開のありようを型となって支える装置になっていた。妻戸の語がなくてもその場となる事例もあるが、おおよその妻戸にまつわる傾向は、これまでの検討で理解されると思われる。

注

（1）拙稿「『源氏物語』の格子考」（『王朝女流文学の新展望』竹林舎、二〇〇三年五月）

（2）拙稿「『源氏物語』の障子―寝殿造の屏障具―」（『源氏物語の展望』第三輯、三弥井書店、二〇〇八年三月）

（3）拙稿「寝殿造の接客空間―王朝文学と簀子・廂の用―」（『古代文学研究　第二次』18、二〇〇九年一〇月）